



今月の御聖訓



人に物をほどこ  
せば我が身のたすけとなる。  
譬へば、人のために火をとも  
せば、我がまへあきらかなるが  
ごとし。

人に物をほどこ  
せば我が身のたすけとなる。  
譬へば、人のために火をとも  
せば、我がまへあきらかなるが  
ごとし。

【食物三徳御書 一五九八頁】

目次

今月の御聖訓	
巻頭言	菅野憲道 1
【恭講】「大聖人の竜口法難の姿に学ぶ」	菅野憲道 2
《宗祖日蓮大聖人御大会式を奉修》	7
【講演】「謗法ということについて」	石川広覚 8
【フォト・アイ】《御大会式》	10
忘れられた総講頭〔八〕	梶木守三 15
【電報】	20
十二月の行事 師走詠草	

不染世間法・如蓮華在水

菅野憲道

この数日ちよつと冷え込んだと思つたら、文のき榎が黄葉してバサバサという感じで落ち始め、それにつられて銀杏いちじょうの枝も次第に透けて見えだした。自然界も冬支度を急いでいるようで何となくせわしい昨今である。

師走になればまた愚かにも日本人はにわかクリスマスチャンになってクリスマスを祝い、かとおもうと正月には忽ち有名神社の信徒となつて、あとまた無宗教者になるのであるから、何とも騒々しい国民ではある。思うに、戦後日本人の無節操さや軽薄さは、こういういい加減な宗教観に由来しているのではなからうか。またこういう風潮が無気力で未成熟な若者を生み出しているようにも思える。

もつとも戦後日本の場合、宗教団体からして、おしなべてその本質はほとんど拝金教であつて、冠婚葬祭業者の走狗となるか、自ら宗教企業となる撞着におちいったのもむべなるかな、とうの昔に経済優先主義の軍門に下つていたのである。それもまた世法に流され、世間法に染まつて、宗教の本質の何たるかを見失つてしまつたからではないだろうか。

かつて権力者に抵抗して自らの信仰を守つた美談も、王権の圧政にたいしてあくまで神への忠誠を守つた殉教談も、はるか遠い過去の話。軍国主義に骨を抜かれ、戦後資本主義に牙を抜かれた今、果たして何れの教団に権力や財力への抵抗の精神が残されているのであろうか。俗権の下僕となつた教団には三行半をつきつけて、一人一人が人間の何たるか、宗教の何たるかを再確認するところからしか人間の蘇生は始まるまい。

樹木に落葉の季節がある。人に生死がある。組織に興亡がある。歳月に人の泣き笑いの一切を載せて法界は流転し、今年も暮れてゆく。またいつの世にこの土に生をうけ、いつの生にこの正法にめぐりあうであろう。ただ愚かなことにのみ泣き笑ひして流される人生に決別しなくてはとしきりに思う師走である。



お講講話(要旨)

拝読御書 「一昨日御書」(全集一八三頁)

# 大聖人の竜口法難の姿に学ぶ

菅野憲道

竜口法難は、文永八年九月十二日、御歳四十九歳の時に起こった法難で、御一代の中の数ある法難の中でも、大聖人はこれによって発迹顕本をとげられた最も重要な意義をもつ法難として、この報恩の法会を催すのであります。とりわけ大事なことは、この竜口法難会にお参りし、我われが勤行・唱題すること



座の頸の竜口

は、七百年という歳月を越えて、今まさに大聖人が竜口の刑場にお座りになられた、その場その座に我われも連なって一緒にお題目を唱えているのだというつもりで、唱題することでありませう。

「靈山一会 儼然未散」という経文がありますが、このような法会において我われが最も心しなければならないことは、つねに宗祖日蓮大聖人とともにある覚悟であり、身近かに聖祖のお心を感じることであります。ある意味では、このことが、我われをして、法華経の信仰の一番大切なもの、本質的なものを会得せしめる唯一の道ではないかと思うのです。

法難の概要については毎年申し上げておりますので、本日はその直前の「一昨日御書」拝読しました。

## 《平左衛門頼綱の弾圧》

「一昨日御書」という御書は、その題名のように法難の二日前の九月十日、平左衛門尉頼綱が大聖人を問注所に召喚して尋問したこゝへの書状です。

この平頼綱という人は、いわゆる北条家の被官です。鎌倉幕府の機構は執権職とか、連署・引付衆などがあって、御家人による連合

政権であったはずですが、実際はほとんど形骸化しており、北条時頼・時宗といった北条家の嫡流（得宗家）に当たる惣領がその実権を握っていたのです。その得宗家も被官の家臣団（御内人）が支えておりました。その長官（内管領）が平頼綱だったのです。そしてこの内管領は代々平氏（長崎氏）が就任したようです。

当時、御家人の代表としては安達泰盛が大きな力を持っていました。内管領の平頼綱は、得宗被官を代表し、互いに拮抗する勢力の頂点にあったのでした。それも弘安八年になると、平頼綱が安達一族を謀叛の罪で全滅させ、御家人勢力を押さえ、幕府の実権を北条一門で取ってしまったのです。

しかしその平頼綱もあまりに権力に奢ったためか、自分の息子を執権職に就けようと企てたと讒言され、北条貞時に誅殺されます。その息子というのは熱原法難の時に墓目の矢で法華衆の農民を射た飯沼判官のことで、皮肉にも父子ともども竜口で斬首されてしまうという有名な事件が八年後に起こります。

この平頼綱について、最近では歴史学的にも明らかにされつつあるようですが、この御書の最後の箇所にも、

「抑貴辺は当時天下の棟梁なり。」（全集一八三頁）

と大聖人が指摘されている通り、当時、幕府を取り仕切っていたのは若い北条時宗ではなく、政所所司・内管領として家臣団の中心者であった平頼綱だったのです。

その人物が大聖人に弾圧を仕掛けてきたのです。御書には、

「一昨日見参に罷り入り候」（同）

と書いてありますから、文永八年九月十日のことです。鎌倉の念仏宗や律宗の僧俗が結託して大聖人一門を訴え、幕府の力で法華宗徒を弾圧しようと企てたから、平頼綱はいちおう裁判の公平を装うた

めに大聖人を召喚し、形ばかり弁明を与えようとしたのでした。

#### 《大聖人の国家諫曉》

さて、大聖人はこの十一年前の文応元年（一一二六〇）に「立正安国論」を奏呈されたのですが、それに対する回答として、幕府は念仏者等の讒訴を入れ、伊豆の流罪に処するということがありました。三年後に赦免され、再び鎌倉に出て大聖人は法華経を弘通なされていたのですが、それから六年ほど経過した文永五年に、蒙古の使者がやってきて、日本に対し、属国になるか、さもなければ武力で支配する旨の牒状をもって返答を迫ってきたのです。

この来牒に対して大聖人は、九年前の「安国論」の予言的であると、早速十一通の書状を認められ、幕府の主だった要人や寺社の別当等に遣わされて、かねて「安国論」で予言した通りであり、他国からの侵略という危機が目前にせまってきた以上、早く仏法の正邪を糾明して法華一乘に帰すべきことを訴えたのですが、これも黙殺されていたのです。

それから三年たった文永八年の夏六月、日照りが続いて作物が実らない厳しい旱魃が襲い、幕府は鎌倉や京都の主だった寺社に対して祈雨を命じました。鎌倉では極楽寺の良観房忍性が幕府にも重く用いられておりましたから、早速雨請いの祈祷が良観にも命ぜられたのです。

#### 《良観房と真言律宗》

ところで、大聖人はこの良観房に対して、「律国賊」といって、とりわけ厳しく破折されております。

当時良観房が唱えた真言律は、真言に戒律をあわせて用いた宗派で、僧侶は二百五十戒、尼僧の場合は五百戒を厳格に持つことを宗

旨とし、それだけではなく日本中の在家男女に八斎戒の戒律を弘めようとした人物です。またその一方で全国各地で慈善事業や土木事業を行い、世の中から生き仏のように敬われ、忍性菩薩とまで称されていたのでした。

しかしこのような厳格な戒律主義は、末法の衆生に実行できるはずもなく、偽善に陥らざるをえないし、現実を無視したものともいえません。

法華経では、不断煩惱不離五欲といつて、煩惱を断ずるなどという末法の衆生には不可能な持戒にあるのでなく、煩惱をもったままでも「受持即持戒」といって一心に法華経を受持するところに、唯一の法華経の大戒が成就すると説かれます。

言葉を変えていえば、仏の慈悲心とか、正法を惜しむ精神において唯一の戒律があつて、それが守られればほかのものは枝葉の問題であるから世間普通の道徳でよいという戒律の考え方です。これを乗急戒緩ともいいます。

いつでも世間というものは愚かなもので、外見や宣伝に惑わされて、その中身や本質を見ようとしません。宗教でも有名人がたくさん入信しているとか、多くの弟子がいるとか、大教団・大伽藍をもっていることで立派だと判断します。忍性房良観も表向きはいかにも持戒の聖僧のように振る舞って要人や大衆から渴仰されていたのですが、その名声を利用して大きな事業を行い、利権を手にいれ、巨額の財を蓄えていたのが実体です。

### 《良観房の祈雨の顛末》

良観房が幕府から祈雨の特命を受けて、真言の秘法を行うことになりました。それを聞いた大聖人は、良い機会とばかり良観房に使

者を立てて「七日のうち雨を降らすことができれば、自分は潔くあなたの弟子になろう」と挑戦し、良観房も喜んでそれに応じ、六月十八日から修法が始まりました。

「種々御振舞御書」には、



雨乞い

「弟子百二十余人頭より煙を出だし、声を天にひびかし、或は念仏、或は請雨経、或は法華経、或は八斎戒を説いて種々に祈請す。」(全集一一五八頁)

とありますから、自分のみならず一門の弟子をも集め、真言の秘法ばかりか、念仏や法華経・八斎戒等ありとあらゆる祈雨の祈禱を行ったようですが、五日間の修法では降る気配もありません。そこで六日目には祈禱僧を三百人を越えるまでに増やして行ったようですが、結局雨は一滴も降らなかつたのです。そればかりか、大風が吹き荒れて、土煙が立つようなありさまだったとあります。

この事態に良観房は、日蓮房が雨乞いを邪魔しているからだ、と、修法の一週間の延長を申し出、幕府においても京・鎌倉の諸寺社に命を發して祈雨を行ったのですが、まったく雨が降らず、みごとに失敗してしまつたのです。

この失敗を確認した上で、大聖人は七月四日になってから、鎌倉

の七里ヶ浜にある小さな池の畔に立たれて法華経を誦読されたところ、その日のうちにしとしとと雨が降ってきたという記録が残っているのです。

この祈雨の一件によって、良観房は世間に大恥をかかされて非常に悔しがり、法然の弟子である然阿良忠や道阿弥等と結託し、その汚名をそそぐために、良忠の弟子・行敏を名義人として、大聖人のもとに法論を申し入れてきたのです。

これに対して大聖人は、私的な法論では意味がない、公場において正々堂々と法論をするならいつでも受けると申し送ったのです。法論に名をかりた策略を感じたのでしょうか。すると行敏は方針をかえて日蓮房が不穏な連中を集め武器を蓄えて騒ぎを企てているとか、先の執権北条時頼や重時等が地獄に墮ちたと悪口しているとし、さらに禅や念仏の寺社を焼き払って僧侶の首を切れと扇動していると訴えたのです。

この行敏訴状の日興上人写本の端書には、

「この行敏訴状は、良観房の訴状である。雑掌は行敏である」

(取意『興全』四六頁)



問注所への讒訴

と、実際には念仏宗・禅宗・真言律宗の徒が結託して、日蓮大聖人とその一門を一举に弾圧しようとして訴状を作ったけれども、その張本人は良観房で、使い走りとなったのが行敏だと書かれています。因みに、その後行敏(乗蓮)は、こののちに何事かがあって大聖人に帰伏したらしく、「盲僧乗蓮」との脇書のある御本尊が授与されていますが、当時は良観房の手先となって動いていたのです。

七月八日に法論の申し入れ、ついで二十日頃に幕府に訴え、八月中幕府に運動して画策した結果、幕府の断罪の方針が固まり、九月十日になって召喚があったのです。

それで大聖人が問注所に出向き、行敏の訴状について、一々に尋問をうけますが大聖人は真っ向から反論します。例えば「爾前無得道」については、法華経に「四十余年未顕真実」と説かれ、もしこの法華経を用いなければ地獄に墮ちるとは、法華経の仏説であって、日蓮の私の言ではないということや、むしろ念仏者が「法華経を捨てよ、抛てよ、閉じよ」等ということとは、法華経を誹謗するものは地獄に墮ちると書かれている以上、念仏無間地獄は当然のことである等と反論されたのです。

他のことについても、大聖人はいちいちに手厳しく反論しましたから、その場で直ちに罪に陥れてしまう思惑であった平頼綱は言葉に詰まってしまったらしく、閉口してしまい、その場では咎めることもできず帰されたのです。

そのことについて九月十二日になって、大聖人から平頼綱に対して、「不快の見参に罷り入ること、偏に難治の次第を愁ふる者なり。」(全集一八三頁)

と、あなたにとっては不快の面会であったらどうけれども、私にとっては何度言っても幕府の人々が法華経を用いないことを愁いるば

かりであると書き記されたのです。

この「一昨日御書」を見ましても、微塵も権力に阿諛おもたすることも怯むこともなく、ただ堂々と、幕府こそが法華経を取り上げるべきであると言張していることに、非常に感銘あたらわざるものがあります。

最後の方のところには、

「是れ偏に身の為に之を述べず。君の為、仏の為、神の為、一切衆生の為に言上せしむる所なり。」(同)

という、申状などにも出てくる言葉ですけれども、これがまったく大聖人の本心であったと思うのです。

### 《我われが竜口法難から学ぶべきこと》

しかしながら、この「一昨日御書」を遣わされた当日、平左衛門は大聖人の住まう松葉谷の草庵を急襲し、うやむやのうちに大聖人を竜口の刑場で断罪しようとした。これが竜口法難です。

そして、大聖人がこの竜口の振る舞いをもって、我われに示されたのは、一言でいうと、我われが人間として生まれてきた以上、命ほど大切なものはないけれども、その命を賭けてまでも守らなければならぬことや、あるいは身命を賭しても成し遂げなくてはならないものがあるということだと思えます。

そして、我われもまた何のために生きているのかを考える時、ただ命だけが尊いとする風潮にすっかり染まって、肉体を維持するためだけに生きているようではなれないと思えます。

命とは何かといえば肉体である。そして、肉体が一番尊いならば、肉体的な欲求に従うことが人生の目的ということになり、おいしいものを食べたり、長生きをしたり、快樂を追求することが人生の目標になってきます。

しかし、そういう人生観は非常に低次元であって、そういう人生観が自分をだめにし、また世の中をだんだんおかしくしていくエゴに結びついていっているのではないかと思うのです。

命が大切なのは当然ですが、本当はその命を懸けても自分たちが成し遂げなければならないことがあるはずであって、そのことを一人一人が見つけていくことが、信仰の本当の目的だと思つのです。そうでなければ宗教は必要がありません。やはり宗教というものは、我われが何のために生まれて、何をなして死んでいくべきかということをおのずからその中に会得せしめるのが宗教たる所以ではないか思つのです。

我われが法華経の信仰を持っていくとき、必ず信仰を破ろうという魔の動きも起こってきます。それはたいいてい自分の肉親が反対をしたりとか、上司が首にするぞと脅かしたりとか、生活にかかわる問題で脅かしてくるのです。

つい最近も、ある老夫婦が、自分の子供が創価学会とか宗門側らしいのですが、御本尊を返してこちらに來なければ最後の面倒を見ないぞと言われたといつて退転する例がありました。人間の一番大切な信仰の問題を脅迫して変えさせる方も大した息子ですが、その手にひっかかって退転するのも愚かなことです。

そんなことではどうして大聖人や熱原の法華講衆の信心をつぐことは出来ません。少し脅されると忽ち変節してしまつのは、道理を根本とせず義理人情や生活を優先するからで、それではいくら口でお題目を唱えても、少しも信がありません。高齢となって死が迫っているからこそなおのこと法華経に身を委せる決定心が求められるのであります。

これらの事は決して他人事ではありません。甘言に乗せられて信心を破ることのないよう、よくよく自戒して精進しましょう。



好天に恵まれた中、恒例の

宗祖日蓮大聖人御大会式を厳肅に奉修

全国的に暖かさが続き、好天に恵まれた十一月六日（土）七日（日）の両日、本年の宗祖日蓮大聖人の御大会式が厳肅裡に奉修された。

お速夜の申状奉読は、多数の参詣者が息をつめるなか、有師（執事）、大聖人（閔道師）、興師（古江総代）、目師（山本副講頭）、道師（武政幹事）、行師（森幹事）の諸氏によって、莊重に奉読された。

また、岡山の興風談所からお迎えした菅原閔道師には「世間をささえる法華信仰」と題して講演をいただいた。師は、自身の正信覚醒運動との関わりと、その経過に触れながら、宗門・創価学会の誤りの構造を指摘し、あわせて当米する高齢者介護の問題など、幅広い取り組み姿勢を披露された。

お題目講の終了後には、例年通りご住職より、信心殊勝のねぎらいと、心づくしの席がもうけられ、各人が時間の許すかぎり歓談が続いた。

御正当会も、早くより婦人部、幹事、役員が集まり、ご供物の準備や、受付、台所など、裏方仕事に余念がなかった。

法要に続く講演は、羽曳野市普妙寺、石川広覚御導師。師匠ゆづりとの定評があるお話は、一語一語ゆつたりと噛んで含め諭すよう。ときおり扶むユーモアが、聴衆の緊張をほぐす妙筆となり、みな時間の経過を忘れて聞き入った。

お花ぐずしの終了後は、再び幹事、役員の手で整理整頓され、すべてを終えた頃には、秋の夕日が暗み始めていた。

なお、今回箕面地区の木村隆一氏には、記録写真撮影を引き受け、お速夜・御正当会とつがなく手腕を発揮していただいた。裏方のみなさん、ご苦労さまでした。

# 誹法と云うことについて

普妙寺住職 石川 広 覚

## 《誤った現今の誹法観》

昨今はずいぶんと我われの周りで、いかがわしい人たちが横行しており、そんな中で誹法論議が盛んですが、今日はその誹法論議という事について、大聖人様や、本日拝読の申状にどのように仰せになっているかを、お話ししたいと思います。

今いわれる誹法というのは、自分にとって都合の悪い人を「誹法」と言われるところが大変多いようです。

特に阿部宗門の人たちは、中身が問題ではなくて、法主に逆らうから誹法と言っています。本来誹法というのは「法に背く」ことをもって誹法というのです。決して人に背くとか逆らったのを誹法とは言いません。

また一方の人たちは、自分にとって都合が悪いから、自分を正当化するために相手

を誹法と罵るということが横行しています。が、こうなってくると、もはや信仰の世界はどこにもないようです。少なくとも大聖人様やご歴代様は、一人ひとりをとって誹法であるというようなことはどこにも仰ってはおりません。

徳川時代末期の儒学者に、広瀬淡窓<sup>たんそう</sup>という人がおり、今の大分県の日田<sup>かんだ</sup>で咸宜園<sup>かんぎえん</sup>という塾を作って学問を教えておりました。この人は、学問に身分、男女を問わないということとで、どなたでもお弟子にしたことから、三千数百人のお弟子がいたといわれています。

この広瀬淡窓が作った歌にこんなのがあります。

「鋭きも 鈍きも共に 捨て難し  
塵と土とに 使い分けなん」

つまり、世の中には本来無駄になるような人はどこにもいない、要は使い方ひとつですべてが活かされるといいます。ですからこの念でいきますと、昨今の誹法論議



広瀬淡窓

はまことに不思議な感じがするのです。

大聖人様は、「御義口伝」の中で、

「桜梅桃李の己々の当体を改めずして、  
無作の三身と開見すれば云云」(全集七

八四頁)

と、私たちは人それぞれに特徴があり、いいところも悪いところもあるから、それを改めたり、全部を同じくすることの方がむしろ不思議だといわれているのです。

ですから、昨今の謗法論議は、それらをどこかに置き去り、善知識とか悪知識を本来の意味と取り違え、自分にとつて都合のいい人は善知識、悪い人が悪知識だと言われているのです。

《真の善知識とは》

しかし、大聖人様は「種々御振舞御書」の中でも、

「釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ。今の世間を見るに、人をよくなすものはかたうどよりも強敵が人をよくなしけるなり。」(全集九一七頁)

と、本来の善知識は、信仰を増進してくれる人だといわれているのです。そうすると、大聖人様の仰せられる善知識論は、自分を厳しく諫めてくれたり、あるいは直接難を与えてくれた人であっても、そのために自分が信仰を強めたり、信仰を深めたりできるのならば、それこそが善知識なり、と仰

せになつていられるのです。

決して自分にとつて都合のいい人を善知識とは仰つていないのです。さらには、

「日蓮が仏にならん第一のかたうどは景信、法師には良観・道隆・道阿弥陀仏、平左衛門尉・守殿ましまさずんば、争でか法華經の行者とはなるべきと悦ぶ。」

(同)

と大聖人様も、法華經の行者として、お經文の通り修行できたのは、極樂寺良観、建長寺道隆や鎌倉の平左衛門尉を始め、北条一門の人たちが厳しく難を与え、伊東の流罪、竜口の頸の座、佐渡の流罪という厳しい難を与えてくれたからで、彼らこそ第一の善知識なりと仰せです。このように考えていけば、私たちの周りには都合の悪い人がたくさんいる方がいいのに決まつているのです。

裸の王様という話がありますが、自分にとつて都合のいいことや耳障りのいい情報しか与えてもらえなかつたら、恐らく私たちは、一人ひとりが阿部日顕さんになつたり、池田太作さんになつてしまふのです。

つまり、私たちにとつて池田太作さんや阿部日顕さんは、善知識そのものなのです。

かつて覚醒運動が始まつた頃に、よく、

何とかして阿部日顕や池田太作は死なないもんだらうかと思つた人がいて、私も、

「住職、何であんなに悪いことをして、謗法の限りを尽くしているのに、罰が当たらないんですか。」

と、よく聞かれました。しかし、私は、

「ちよつと待つてください。あの人たちがいなくなつてしまつたら大変だよ。振り上げた拳固をどうやって振り落としたら良いんですか。けんか相手がいなくなつたら、けんかにならないんだから、あの人たちにはいつまでも健康で長生きしてもらわないと、我われの信心が逆におかしくなるよ。」

と。つまり、創価学会がいてくれ、阿部宗門の人たちがいてくれるから、私たちが正しいことをやつているのが、曲がりなりにもわかるのですから、決して彼らが来ることを拒む必要はないし、毛嫌いすることもまったくないのです。むしろ、どうぞ御達者で、いつまでも元気でいてください。少なくとも、こちらが五体不満足にならない前にまでは、元気でいてもらわないと困ります。というふうに申し上げる方がよいの

(12頁上段へ続く)



アイ  
式》



### 御逮夜

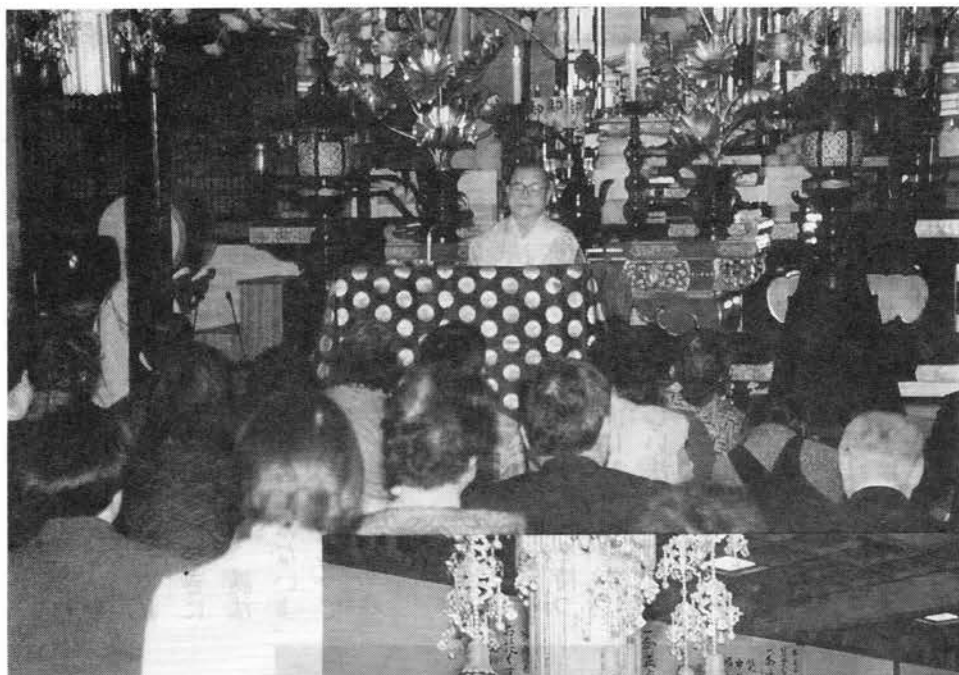
上：御逮夜法要での読経・唱題  
左：講演される菅原関道師  
下：代表者による申状捧読



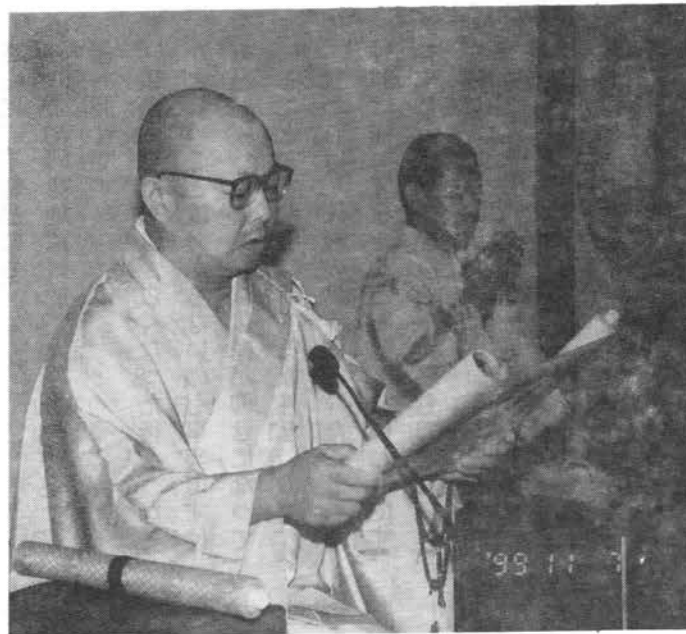


フォ  
《御

御正当会



上..布教講演  
右..ご住職の安国論捧読  
下左..教区ご住職による申状捧読  
下右..お花くずし



(9頁下段から続く)

ですから、誹法ということについても、自分にとって都合が悪いことを誹法といって、自分を正当化するための言葉にしてしまったならば、大聖人様もさぞやお嘆きになるだろうし、ご歴代のご先師方も、誹法というのは決してそういうものではないよ。人間が悪いんじゃないくて、教えが間違っていることですよと言われると思います。

《「安国論」・申状の精神》

法句経というお経の中に、

「邪なる法を持つことなかれ」

とありますが、間違ったお経や教えを持つから、人間が間違った方向に行くのです。

ですから、私たちは正しい法を持つことが大切なのであり、そのことを先ほどご住職が拝読した「立正安国論」の中にも、大聖人様はいろんなお経をもって「安国論」の証明をなさっていますが、まず、

「仁王経に云く、人仏教を壊らば復孝子無く、六親不和にして天神も祐けず、疾疫悪鬼日に来たりて侵害し、災怪首尾し、連禍縦横し、死して地獄・餓鬼・畜生に入らん。若し出でて人と為らば兵奴の果報ならん。」(全集三二頁)

と、正法を破つてしまえば、一族すべてが不和になってしまい、諸天善神も私たちの加護を忘れてしまうし、または世の中の天災地災が次から次へと起こって私たちを苦しめると仰せです。

また、法華経の譬喩品の中には、



講演される普妙寺 石川広覚師

「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」

(同)

と、南無妙法蓮華経を信じないで、南無妙法蓮華経は間違ってますよという人は、亡くなった後に阿鼻地獄に堕ちると仰せです。

さらに、不軽品にも、

「千劫阿鼻地獄に於て大苦悩を受く」

とも仰せです。

確かに私たちは、亡くなった後どうなるかということは分からないのも事実ですけども、しかしこれは仏様が仰せになつて

いることです。信ずる以外ないのです。我われは、死後の世界に行ったこともなければ帰ってきたことも当然ないわけですから、絶対に経験も、体験もできないのが臨終です。臨終だけは、経験しただけで、一度も学習せずに、行きっぱなしなのです。確かに、死に損なつた人があるかもしれませんが、あるいは向こうに光が見えたところまで行って来たという人がいるかもしれないませんが、何れにしても亡くなつてしまつて帰ってきた人は一人もいないのです。

ですから、この死だけは、経験した時が終わりですから、こうやって話していても、臨終の後のことについては、お経で説かれていることしかお話しできないのです。

ですから、我われはこの世ではたかだか生きて、金さん銀さんでもまだ百七歳ですし、それよりも悪いことをしていれば、もつと短い命しかありませんが、亡くなった

後は何年生きるか分からないし、何年あるか分からないけれども、その死後の長い時間を地獄という世界に堕ちていたら、これほどつらく悲しいことはありません。

そのために大聖人様は、「安国論」でも、「善友を遠離し正法を聞かず悪法に住せば、是の因縁の故に沈没して阿鼻地獄に在りて受くる所の身形縦横八万四千由延ならん」(同)

と、南無妙法蓮華經を教えてください。本当の友だち、南無妙法蓮華經を頑張れといつてくれる人を外に追いやつて、悪法を持つならば、膨大な時間を苦しまなければならぬと仰せです。

ただ、仏様はまことにありがたいことに、「臨終の事を習ひて後に他事を習ふべし」(全集一四〇四頁)

と、自分がいつ亡くなつてもいいように考えて、信仰も生き方もやつておきなさいといわれているのです。つまり、たった一度しか経験できない臨終の時に、悔いを残さない信心が大切だといわれているのです。そのことをまず学ばば、いろんなことが何の苦もなく行っていくことができるといわれているのです。

しかし、現実には、

「悲しいかな、皆正法の門を出でて深く邪法の獄に入る。」(全集三二二頁)

となる人も多いのですが、そうならないように、

「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ。」(同)

と、正しい信心をし、大聖人様にお迎えいただけるようにならなければいけませんよ、といわれているのです。

謗法というのも、決して自分の都合にあわせていいとか悪いとかいうようなことではないのです。

大聖人様の御申状の中に、

「日蓮諸經を引いて之れを勘へたるに、念仏宗と禪宗等とを御帰依有るがの故に、日本守護の諸大善神、瞋恚を作(な)して起す所の災ひなり。」(全集一六九頁)

と、この世の中にいろいろ悪いことが起こつたり、私たちの身の上にも決していいことばかりが起こらないというのは、悪い教えを行ってしまうとそうなるんだと仰せになっています。

また、御開山日興上人の申状の中には、「爾前迹門の謗法を退治し、法華本門の

正法を立てられれば、天下太平国土安全たるべき……謗法を退治し、正法を弘通するは治国の秘術、聖代の佳例なり」(興全)三二三頁)

と、正法を立てるのが立正であり、正法を行ずるということが安国に繋がるんだと、仰せになっている通りです。

このようなことは、さらに日目上人、日道上人、日行上人、日有上人等の各上人の申状に、ともに謗法を排して南無妙法蓮華經の正法に依るべきことを示されているのと同様です。

#### 《南無妙法蓮華經は円の教え》

私たちは、ややもすると自分にとって都合の悪い人やいやな人を全部のけようとするので、自分にとって都合のいい人ばかりでは、世の中は成り立ちません。

四苦八苦の中の一つにも上げられていますが、自分たちにとって都合の悪い人と暮らしていかなければいけないから、我慢もできるし、我慢も習うのです。

自分が嫌っていいながら、自分だけは相手に好かれようというのは大きな間違いです。世の中というのは、決して隣の人や周りの人がすべて自分にとっていい人とは限

らないのです。虫が好かない、肌が合わない、どうしてもあの顔が気に入らない人が確かにいるでしょうが、それを我慢することとが大切なのであって、我慢をしないと私たちの信仰もできなくなってしまうのです。

例えば、朝晩の五座・三座の勤行も、我慢ができなくなると、自分が朝寝坊をして、五座ができなかった時、人間は何を考えるかという、できなかったことをお詫びする前に、できなかった理由を考え出して、何とか自分を正当化しようとするのです。しかし、自分を正当化するために、信仰を誤魔化したりするようなことがあってはいけません。我慢とか正直ということといわれるのはそこにあるのです。

南無妙法蓮華經のことを円教、つまりまん丸い教えといいます。どこにも欠けたところが無いから円といい、そこから、大聖人様の教えを円教といいます。

自分の心の真ん中に丸いのを思い浮かべてみてください。どこか棘が出ていたり、あるいはへこんでいるところはありませんか。つまり不満というものは、まん丸からへこんだり棘が出たところがあるから、これを不満というのです。あるいはひびが入っ

たり、いびつになつていたりするのを不足ともいいます。また、人のまん丸い心を見て、自分も丸くしたい、あるいはそのまんなの心を自分に持つてきたい、これを不平といいますが、不足・不平・不満は、なるべくならば無い方がいいに決まっています。



講演を真剣に聴聞する参詣者

大聖人様はまん丸い心になれとお説きになつていきます。まん丸いボールはどこにでも転がれますが、いびつなボールは転がりませんし、棘があつたらさわれません。栗のいがはどんなにまん丸くても、棘が出ていますから、我われが生身の手で触れば痛

いはずです。

そのような心にならないように、謗法についても、自分を正当化するために相手を罵る言葉にはしないことが肝心なのです。

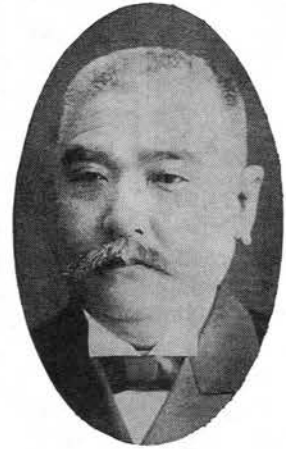
私たちも人を見て、どんなにいびつで棘とげの心を持つていようと、丸くするために、どうか南無妙法蓮華經を唱えてください。大聖人様の信仰をしてください。源立寺にお参りに来てください。

今私も不幸にして、少しゆがんでいますけれども、やがて丸くなるように努力していますから、私と一緒に努力して下さいというのが信心であり、折伏ということになると思ふのです。そうすれば世の中の、誤った教えに惑わされることも無くなるのです。

最後に、皆様方には、只ただ仏様が「邪なる法を持つことなかれ」と仰せられた通り、間違つた教えを持たず、間違つた法を行じないこと。また謗法論議も、自分にとって都合の悪い人を、自分を正当化するために使わないことを、お願い申し上げます。本日のお会式のお話にさせていただきました。

ご清聴ありがとうございました。

【荒木清勇居士略伝】



# 忘れられた総講頭〔八〕

槻木 守三

## \* 霑師の隠退

明治二十二年二月十一日は近代日本にとって大きな節目の日である。すなわち明治憲法が發布され、国会が開設されることになった日である。日本はこれによって名実ともに近代国家となり立憲君主制のもとに、欧米列強に追いつけおいこせと富国強兵の道を突き進むことになる。

明治三十年代には市民社会も大きく変わり、現代とほぼ似たような生活様式になったといわれるが、このような社会の急速な変化はただ生活習慣などの外面にとどまらず、宗教心や倫理観という精神

面までにおよび、日本人のこころが急速に変化していったことを幸田露伴や小泉八雲が指摘している。

そうした風潮にも拘わらず、仏教界各派が廃仏毀釈の痛手から立ち直ることができたのは、ひとえに教義の革新と民衆教化にあった。けれども修験宗や普化宗、あるいは奈良のいくつかの古寺のように、急速に衰退して滅びていった宗派もあった。これらの教団は時代の変化に対応できず、自助努力を怠った好例でもあろう。

日蓮門下の一小派の大石寺派についていえば、この困難な時代に、荒波にのみ込まれることもなく、かえって教勢の拡

大に転ずることができたのは、ひとえに霑師の尽力によるところが大きいといえよう。

本山の借財を整理し、諸堂の修復を終えた霑師も老体いかんともしがたく、明治二十二年四月末をもってなかば強引に学寮に隠退し、弟子の大石日応師（慈含）を後重として、ようやく念願かなって引退することができた。

その後は自ら再興した学寮（蓮蔵坊）で老境を過ごされたが、毎土曜日に宗学生のために御書・三大部を講じられるなどなお護法心は衰えることがなかった。けれども、余命は確実に残り少なくなっ

ていった。

そのころ同じ隱尊の布師は富士見庵に住まわれていたが、新貫首の応師の法務を補佐され、丑寅勤行等の代理を勤められるなど健在であった。余談ながら近代宗門の法類は霽師の弟子の蓮葉庵系と、この布師の弟子の富士見庵系に二分され、この法類關係を中心に宗政が動いてきている。同じ隱尊の盛師は常在寺にあつて当時浅草・井生村楼で開催されていた月例の興門布教演説会にて富楼那の弁舌をふるっていた。

三度住山して難局をきりぬけ、多くの人材を育ててきた霽師は、かくしてあたかも大石寺の経営がようやく安定軌道に乗るのを見届けるように、明治二十三年六月二十四日、七十四才をもつて靈山に旅立たれたのであつた。辞世の歌に、  
「つたなく香のみは残れみたびまで  
御法の枝に 結ぶこのみの」とある。

\* 応師と布教会

新貫首の応師がまず最初に手がけた仕事は布教会であつた。護法會議以来の懸案であつた宗門再建の方策は布教・興学以外にないことを持論としてきた応師は、



布教会報

派という連合体宗派の中にあつた大石寺派が、諸山協力の中に埋没してしまつて、その正統性を發揮できないでいるジレンマを克服し、自立した教団体制を確立するねらいがこめられていた。

すなわち要法寺がやや優勢の興門派内にあつては、彼我の間に総本山や管長の制定問題など主導権争いが生ずるばかりでなく、つねに教義上の齟齬による摩擦が続いていた。興門の八山協和といつても名ばかりで、諸山の主張は大きく隔たつていたため宗派内部での政争にあけられていたのが実態であつた。大石寺派が自山の正統性を強調し続ける限り、何れ機会をみて分離独立する以外に道はなかつたともいえる。そのため布石としての布教会設立でもあつた。

まず主だった僧俗にはかつて明治二十二年八月二十八日に日蓮宗正統興門大石寺布教会を發足させた。大石寺派の僧俗を再組織化し、これによつて布教演説や出版を盛んにし、人材を育成しようというものであつた。

またこの布教会設立には、日蓮宗興門

- 布教会長 大石日応 (貫首)
- 本部幹事長 土屋日柱
- 本部幹事 広瀬日台・佐董慈要・(僧侶) 富士本日契 (智境)・阿部慈照 (日正)

本部幹事

松島覺道・荒木清勇

(信徒) 加藤道栄

布教会では早速機関誌「布教会報」を毎月発行し、各地方担当者をきめて会員勧誘に乗り出すことになった。本部幹事の富士本日奨師(智境・広正日意)はすでに源立寺から住本寺住職に転じて宗務行政にも奉公していたが、この時の会員勧誘のため関西から九州地方に出張した通信が「布教会報」に掲載されている。

「前略 陳者<sup>のよは</sup>本月一日拙寺(京都住本寺)講員一同を招集し、ひろく興学布教の必要、雑誌発刊の裨益<sup>ひえき</sup>等、巨細の事實言語の及ぶ限り演説仕り候ところ、講員一同、存の外に賛成、実に草木の風になびくがごとく、貴賤男女先を競うて入会せり。同六日には滋賀県大津に出張せしに講員寺田氏一族大いに賛成して会報をも購読せんと心中喜悅色に顕われてみゆ。

同九日には大阪に出張し、寺檀一同協議におよび候ところ、またまた甲乙貴賤一家奴婢にいたるまで、この萃を翼賛し未曾有のご発軫<sup>はつしん</sup>、時期適當のご施化なりと入会同盟先進を争えり。つ

いては田村量詮・南広徳・佐藤梅松等は日々檀越信徒の毎戸を訪うて本会創立の所以を説き、居田蓮乗・牧野浄実等は講員を愛撫して勧誘教化非常の尽力あり。わずかに一週間をも経ざる二百余名の入会あり。

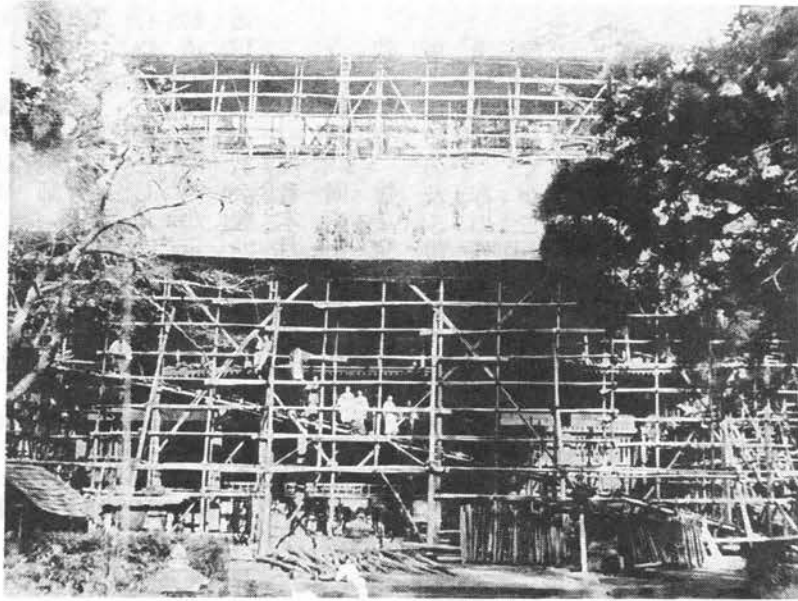
同十七日正気丸に乗船し、同十九日博多港に着船し、かねて聞く荒木清勇商用のためとて同港に滞在せりと。すなわちその宿石田平吉方に訪ねて本会の主義逐条に及んで協議候ところ、同人の欣喜まさに踊るがごとく、多年待ちもうけたるはこの興学・布教・雑誌の一条なり。ほのかに聞くところ実に御設立あいなり候うえは願望既に成就せり。いままでかれこれ懸念の私想も今はただ本会に賛成し、身命に代え、及ばずながら尽力仕るべく、ついでにただいま持ち合わせを規則第十五条特別寄付金のうち即納として金十円奉納つかまつるべしとて差し出しける。おもうに定めて本人の思想本会のため一大運動を試みんとのござ候。：以下略。」(布教会報三号二八頁)

荒木清勇は、これより以前明治二十一年二月には一致派講頭畠山弥兵衛との問答記録「問答顛末事実略記」を発刊したり(富士宗学要集六巻に収録)、翌年四月二十日には日本仏教と連帯をはかるため来日したセイロン神智学協会会長オルクット氏を牧野浄実とともに静観楼に招いて会談し、高祖遺文録(注・日蓮大聖人御書)を贈呈するなど、正法興隆のための奉公を忘れることはなかった。そこに布教会発足の朗報を聞いて、わがここのように歓喜雀躍し、率先してその活動資金の御供養を申し出たものであった。「身命に代え、及ばずながら尽力する」という励ましには富士本師も大いに力づけられたに違いない。久留米露妙寺に廻ってさらに二百余りの会員を勧誘したことが記されている。

その後、大石寺派の布教・興学等は布教会が中心になってすすめられていくが、清勇もその言葉どおり西国布教巡回の帰途の応師・土屋、阿部師を招待したり、明治二十四年十一月の濃尾大地震では荒木清勇らが率先して布教会経由で義捐金

をおくっている。さらに明治二十五年には屋根銅瓦葺き替えの事業がはじまると早速特別御供養を申し出ている。

なかでも宗門の興学と人材育成にはい



改築中の御影堂

もまた護法熱心な篤信者で、博士自らリードして薬学を振興をしてきた経験に鑑み、宗門の振興の方策を練っていた。そうした折りに荒木清勇と会談する機会を得て、教学振興策について意見の

一致をみ、興学基金の設立（注・奨学基金のようなもの）を当局者に提言する事とし、明治二十六年十二月に大石寺法務局に建言書を提出している。

さらに明治二十九年にはいると、応師は再び大石寺派の分離独立を企図し、加藤日普師（学頭）富士本師、荒木清勇等々僧俗の中心者を本山に召集し、たびたび会議を重ねることになったが、荒木清勇は応師の要請にこたえて諸方に運動し、翌三十年九月には佐藤慈一師を連れて内務省久米社寺局長に直接面談して分離独立の陳情をするるとともに、その方策を探っている。

**\*清勇の縁故者**

に日蓮正宗と改称)の誕生のうらに、荒木清勇の身を惜しまない奉公があったことを忘れてはなるまい。

ところで清勇の本業のほうはどうなっていたであろうか。当時の生き証人は皆無となり、その記録とてほとんどないが、わずかに米穀取引所関係の資料中にその活躍の跡をみる事ができる。大阪米商会所は明治二十六年の取引所法により株式会社として改組され「大阪堂島米穀取引所」と称している。この時の記録によれば荒木清勇はすでに大阪米商会所の仲買人兼株主として八株を所有、株主一五二人中二十三位で、中堅の業者であったことがわかる。上位の業者は住友や藤田など財閥系の商店が株主であるから新進の仲買人としては相当なものであった。明治五年頃裸一貫で入った米相場の世界であったが、時代は清勇に大物相場師への道を用意していたようである。この後いよいよ頭角をあらわして理事になるまでに力をつけていった。

つでも関心をもっていたらしい。ちょうどその頃、日本薬学界の先駆者でもある下山順一郎（東京帝大教授・薬学博士）

こうした永年の努力が実って分離独立認可が下りたのは明治三十三年九月十八日のことであった。日蓮宗富士派（後

しかし荒木清勇の群をぬいた活動を支えたものはその資本力ばかりではない。その多彩な人脈もまた行動力の源泉になっていたと思われる。というのは清勇の妻きぬが寺田屋の三女であることは以前にも紹介したが、明治初年頃の寺田屋は薩長の志士のたまり場になっていた関係で、伊藤博文ら明治の元勳と家族同然のつきあいとなり、その子女も前途有為の青年のもとに嫁いでいた。この縁故関係が人脈となっていたとおもわれる。

すなわち、清勇の妻きぬの姉妹で判明するものを列挙すると、

\*長女は河西陸軍中尉（後に少将）に嫁ぐ。近衛旅団長。

\*三女は荒木清勇の妻、好平（照平）・隆平・しずこの母

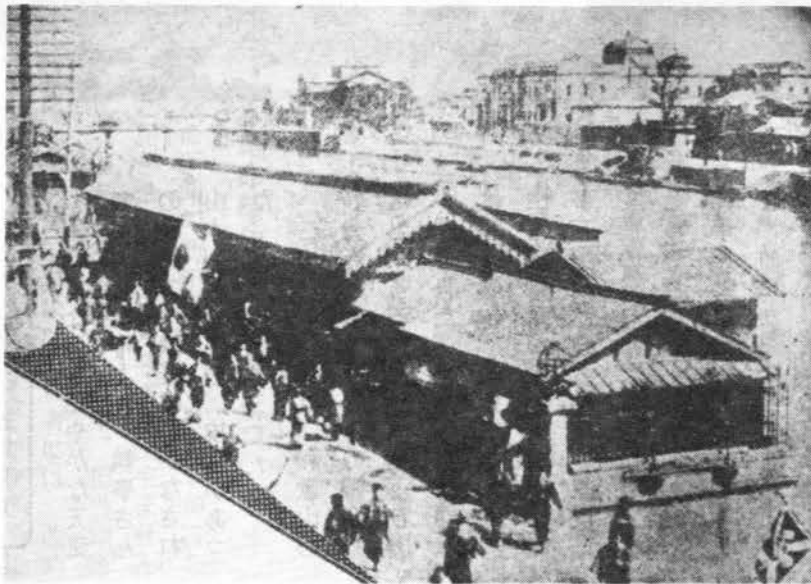
\*四女は荒木清勇の先妻。子孫は北新地和洋菓子柳月堂当主・蓮華寺檀

\*五女は松山家に嫁ぐ。子は松山茂海軍大将（航空本部長・軍令副部長、山本

五十六の師）

\*六女は田辺家に嫁ぐ。子は田辺関西配電社長（関西電力前身）

\*七女は八代家に嫁ぐ。子は八代則彦（大蔵審議官を経て住友銀行頭取）、八代等（阪大工学部部長）



明治初期の堂島取引所

という錚々たる顔ぶれであった。八代等は福重好平から米留留学に行く前に本郷の家で受験勉強の英語を教わったと述懐しているから、昵懇にしていたことが想

像される。

そればかりではない。郷党の先輩磯野小右衛門は米穀取引所の理事長であったし、また遠縁にあたる副重家（住本寺檀）も園部で銀行頭取を勤めていたといわれる。

また荒木清勇の回りには、その人柄を慕って多くの人が集まり、堂島の家には多くの商人や軍人が出入りしていたといわれ、ばんり陸軍大尉などもその中の一人である。なかでもこの頃、横浜で貿易商を営んでいた荒木儀兵衛（妙光寺檀・中野区住）は、荒木清勇の人物に惚れ込んでその養子となり姓名を譲り受けたともいわれている。

かくして荒木清勇は明治三十一年六月には大阪商業会議所会員の推薦により大阪市議員に当選する。ちょうどその頃の大阪は、天王寺で第五回内国博覧会が開催される直前にあたり、大阪が近代産業都市として飛躍発展する時期の市政の一端をも担っている。一期四年の在任であったが、その間の活躍は大阪市議会の議事録に残されている。（つづく）

恵日だより



心を込めてお花作り

曇り空ながら穏やかな天気  
 で、午前九時より、執事さん  
 の導師で、読経唱題がなされ、  
 山本副講頭から、挨拶があつ  
 た。

この日ご住職は、和歌山の  
 妙音寺・妙海寺さんの御会式  
 に出席するため、早朝より出  
 かけられた。また尾林講頭は、  
 体調を崩して静養中とあつて、  
 山本副講頭が中心となり、諸  
 事万端が進められた。並行し  
 て進められた、お花作りでは  
 老いも若きも、男も女も一同  
 に車座となり、慣れぬ手つき  
 で、竹にからまるテープと悪  
 戦苦闘し、無事に四〇〇本のお  
 花を作り上げた。

大掃除・お花作り

十月三十一日(日) 午前九時



ご住職とともに記念撮影(七五三詣り)

七五三祝い

十一月十四日(日) 午後一時

今年は十五日が月曜日とあつて、十四日の日曜日に参詣を希望する問い合わせが多く、この日、午後一時より奉修された。読経唱題の後、源立寺重宝の日興上人御本尊を頭頂にいただくと、みな神妙な面もちで、ご住職の唱えるお題目に、唱和していた。なお記念撮影した写真は、後日に郵送いたしますので、しばらくお待ち下さい。

祝 七五三

猪名川町	多田 絵理花	七歳
	多田 涼馬	五歳
香芝市	笹川 隼希	五歳
豊中市	宮下 昌也	五歳
川西市	蟲辺 伽織	七歳
宝塚市	深瀬 なつ子	三歳

おめでとうございませす。

ご案内・お知らせ

\*パンフレット  
「法華講のみなさんへ」の配布

御会式の折りに、来る第三十回法華講記念総会、及び平成十四年の、立宗七百五十年慶讃法要への心構えを説明した、パンフレットが配布されました。これは以前より、ご住職が繰り返し、強調されてきたように、流れゆく年月のなかで、たまたま出会った記念行事に自分も参加する、という消極的な意識と姿勢、在り方を改めて、積極的にこの佳節を意識し、自分にどんな報恩ができるのか、自分は何のために信仰をするのかを、考えて欲しいということ、例示してあります。パンフレットをもらつてない方は、お寺にありますので、是非一読し「私の報恩行」にお役立て下さい。

\*継命新年号の発送について

継命新聞の新年号は、十二月下旬にお寺に届きます。元旦に発送は出来ませんので、年末の発送となります。担当地区(槻木・神戸)および関係者には、改めて日時のご連絡を差し上げますので、よろしくお願い申し上げます。

(新聞担当・児玉幹事より)

【師走詠草】



〔十一月七日御会式の日〕  
正信の 僧俗集う お会式に  
〔梅本 咲枝〕

櫻花匂う 小春日のごと

〔十一月十四日 大阪城にて〕

天守閣 見上げる我れに かくあれと

夕日に映える 塔の輝き

〔戦艦大和〕  
〔橋本 圓子〕

東支那海 水深三五〇メートルに

今よみがえる 戦艦大和

戦艦大和の 菊の紋章 テレビに映る

あの日を語る 八十路過ぎし人

謎秘めて 五十余年を 沈み居し

自爆なりしや 大和の最後

〔輪廻転生〕  
〔故橋本 義一〕

人の死体 むさぼり喰らう 鷺の群れ

鳥葬に観る 輪廻転生

色即是空 心読のいま 漸くに

ひんがしの空 うす明りせり

【恵日俳壇】



〔宮下 留代〕

菊薫る お会式参加 信深め

小春日に 赤いべべ着て 嬉しさう

# 十二月の行事

一日(水) 午後二時 お経日

五日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会

七日(火) 午前十一時 広基寺御大会式

十二日(日) 午後一時 お講・役員会

十三日(月) 午後一時 お講

十九日(日) 午前十時 年末大掃除

※十二月一日の継命新聞発送は、『蛭池・服部』地区が担当です。  
※十二月下旬(新年号)の発送は、『神戸・槻木』地区が担当です。

『恵日』の購読を希望される方は、左の口座に郵便振替にて購読料(年間二〇〇〇円〔含送料〕)を払い込み下さい。

加入者名 源立寺法華講

口座番号 0093015114366



恵日

編集兼  
発行人

菅野 憲道  
恵日編集室

平成十一年十二月号 通巻五十八号  
平成十一年十二月一日発行

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (〇七二七) 五一一三三三五  
E-Mail: genh@wombat.or.jp

購読料 年間二〇〇〇円(含送料)

加入者名 源立寺法華講

〒振替 口座番号 0093015114366